前世の恋人

真澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
前世の恋人

【Ｎコード】
Ｎ２３１７Ｍ

【作者名】
真澄

【あらすじ】
満員電車で隣に立った彼女。どこかで会った気がするのに思い出せない。けれどたまたま手が触れてしまったことで、遠い記憶が一気に甦る――。

――誰だっけ……？

発車まであと１０分。乗り込んだ急行電車で、隣に立つ女性に何か引っかかるものを覚えた。しかし、いつどこで会ったのか思い出せない。

徐々に増え始める乗客に押されて彼女との距離が縮まる。

会ったことあるような気ぃするんだけど。

ぼんやり記憶をたどっていると、尻のポケットで携帯がぶるっと震えた。先ほど途中駅まで送ってきたばかりの恋人からのメールに、自然と表情がゆるむ。

『いま家についたよ。遠回りさせちゃってごめんね』

『こっちは発車待ち。なんか見たことある人が同じ電車に乗ってんだけど、こないだ会ったお前の友だちとか？』

先日デート中に偶然遭遇した彼女の友だち。4、5人いた中の誰か——そんなあたりではないかと勘をつけたのだ。

『そっちの沿線にはいないはずだけどなあ…よく行くコンビニの店員さんとかそんなんじゃない？』

『あーそんなんかも。それにしとくわ。じゃ電車混んできたからケータイしまうな。おやすみ』

『了解ーおやすみなさい。

P．S．』

……彼女からの返信に苦笑してしまう。

P．S．前世の恋人なんての、どう？

何も急に突拍子もないことを言い出したわけではなくて。たまたま今日見た映画が——古い映画のリバイバル作が——前世の恋人と再び恋に落ちる、みたいなやつだったのだ。

生まれ変わりとかってないよね、というのが2人の一致した意見だ

ったので、今日はすっかり「悪い、来世で返すからちょっと金貸して」「ねえそれ前世の仕返し？」などと――まあ映画自体は面白かったんだけど――「前世」で遊んでしまった。

前世の恋人、ねえ……。

苦笑いしながら携帯をしまおうとして、吊革から手を離した一瞬――。

ガタッ

タイミング悪く電車が発車して、大きく揺れた。

咄嗟に目の前の吊革をつかむ。そして、

そして。

心臓がはねる。

カッと頭に血が上る。いや

手、だ。血が一気に集中したのは。

ゆっくりと自分の左手に視線をやり――その手を凝視する。隣に立っていた女性の手が、自分よりわずかに早くその吊革をつかんだらしく、彼女の手の上から握りしめる形になっていた。

そして気づいてしまった。触れた彼女の手によって。

この人を、知っている。いや、知って、いた。

信じてなかったのに。

前世とか、そんなの。

なあ、予想、当たっちゃったよ……？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

吊革を離し、手すりに持ち替える。彼女の唇が「すみません」の形に動くのが見えた。視線を窓のほうに外しながら、濁流のように押し寄せる記憶に負けまいと――手すりを握る手に力を入れた。

この人に会うのは、初めてだ。

けれど、この人を知っている。

いや、知っているのはこの人じゃなくて。生まれるずっと前、違う顔と名前で生きていた頃の――だから信じてなかったってのに！

彼女は、前世で、心から愛した人だった。

ガラス窓に映る彼女のうつむく顔を見ながら、胸がどんどん湿っていく。水をたっぷりと吸い込んだスポンジのように、何か少しでも振動があれば滴り落ちてしまいそうだった。

号泣したのはいつだっけ。しゃくりあげて。そう、あれは――動か

なくなった彼女の手を握りしめながら。

2人が出会ったのは高校生のときだった。入学して同じクラスになり、少しずつひかれていって、つきあってほしいと告げたのは2年生の秋。お互い一年間も片思いをしていたと知って、その時間がもったいなかった、と笑い合ったのは、大学に入り遠距離恋愛が始まってから。でも就職してまた一緒にいられるようになって。そろそろ2人で暮らそうか。そんな話が持ち上がるのも自然な年齢になって。引っ越しを目前に、別々の家へ帰る最後のデートで、映画を見たんだ。

恋人たちが、何度生まれ変わっても前世の恋人とまた恋に落ちる。そんな映画の余韻と、もうすぐ一緒に暮らせる自分たち。彼女が甘やかな気持ちになるのも当然で、だからふだんなら口にしないようなあんなことを言い出したのだ。

もし生まれ変わったら――と。

「もし生まれ変わったら、ちゃんと私を見つけてくれる？」

「いやあ、犬とかクワガタとかになられてたら自信ねえなあ」

すぐそういうこと言う！と怒る彼女がかわいくて。

「ほんと甘さが足りない男だよ」

「無理です。自分、無糖ですから」

絶対同じ種に生まれてやるからね！と珍しく粘ったのは、何か予感していた？　ほんとは来世なんてものがあるのならそれに嫉妬できるくらい、彼女に惚れていた。だから次なんか考える必要ないだろ、今全力で愛されてんだから。とか――いや、やっぱ無理だ。そんな恥ずかしい台詞。

でも、まあ今度の誕生日あたりにそんなようなことを言ってやるかな。なんて考えていた。

まさかその日が最後になるなんて思っていなかったから。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

動かなくなった彼女の手を握りしめながら、号泣していた。

生まれ変わりとか来世だとか。なんでも信じるから！　どんな姿をしていても必ず見つけるから。だからまだ行くな。必ずきみだと気づいてみせるから。次もその次の世も、何度でも。何度でも。何度でも。だから今はまだ――。

――ああ、たしか。そんなことを叫んでいた。一気に甦った記憶にぼんやりとする頭で、隣に立つ彼女を見つめる。きみなんだね。会いにきてくれたんだね。

どう告げようか。いや彼女はまだ気づいてないかもしれない。驚かせてはいけない。待とう。もし彼女が顔を上げたら。こちらを向いたら。目と目が合ったら。そしたら――

そしたら？

どうするって？

……我に返った。それでいったい自分はどうするというのだ。前世で叶わなかったぶん、隣の彼女と一緒になる？　まさか！

そもそも今、この胸のスポンジを浸しているのは誰の涙だ？　自分？　それとも違う顔と名前で生きていた頃の自分？――それはもう自分じゃない。

あのとき誓ったのは、生まれ変わりを果たした彼女を必ず見つけるということ。その約束が守られた、その奇跡だけでも十分じゃないか。第一、

第一。

前世の恋人に会っただなんて、ヤキモチやきの彼女――今の自分が心から愛する人、が怒る。怒るだけならいい。1人で泣くんだよあいつ。

大切な人を悲しませることはもうできない。それでいいよな？　前世のオレ。

空いた席に彼女が座る。それをちらりと見てから電車を降りる。たぶん、これでいい。

ホームをゆっくりと歩きながら、駅を去る電車を見たとき、少しだけ――

ほんの少しだけ。

痛んだのは、間違いなく自分の胸だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

……思い出せない。

土曜日のくせに意外と混んでいた急行電車。大きく揺れてあわてて吊革をつかんだら、隣の男性と手が重なってしまった。

吊革を譲ってくれた男性に口の動きだけで「すみません」と告げる。ちらりと見えたその顔に見覚えがあるような気がして――窓ガラスに映る姿を見ようとしたら、目が合いそうになってあわてて逸らした。

どこかで会ったような気がするんだけど。

もともと他人の顔を覚えるのは得意じゃない。少し考えてもやっぱり思い出せなくて、考えるのをやめた。

かわりに今日見た映画の余韻に浸る。古い映画のリバイバルで、結ばれない恋人たちが次の世でもまた出会い、また恋に落ちながらもやはり結ばれることを許されず、生まれ変わったらまた会おうと約束を交わして次の世を待つ。そんな話だった。

生まれ変わったら、かあ。

……ん？

……ウマレカワッタラ？

なんだろう。何かが引っかかる。

何気なく顔を上げ、窓ガラスに映る車内を見て。

どきり

と、した。
先ほど手が触れてしまった男性が左のほうをじっと見ていて――それはつまり。

私のことを見ていた。

とても優しい、愛しいものを見つめる目で。

目を合わせてしまったら何かが溢れてきそうで、窓ごしに見ることしかできなかったけれど、その横顔から目が逸らせなくなる。

――生まれ変わったら？

温かな手。

生まれ変わったら？

私を包んだ大きな手。

生まれ変わったら？

まなざし。

生まれ変わったら――？

ああ。

どうして忘れていたんだろう。忘れることなんてできたのだろう。
あんなにも大切だった人を。

心から愛していた、この人を。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

あのとき私の頭に浮かんでいたのは、「余計なこと言っちゃった」
という反省だった。

あれは確か、そう、車だ。車にぶつかって、痛いとか怖いとかをも

う超えてしまって、ああ、余計なことを言って彼を困らせてしまったなあ……と、そんなことを思っていたんだ。

「もし生まれ変わったら、ちゃんと私を見つけてくれる？」

生まれ変わったら、だなんて。タイミングよすぎ。いや悪すぎ。彼「気にしい」なタチだから、答えをはぐらかしたことできっと自分を責める。いいのに、そんなの。

人一倍照れ屋な彼がそんな甘い台詞を言えるわけないこと、知ってたもの。

冗談を言うのも照れ隠しだって知ってたもの。

けど、言葉がなくてもちゃんと伝わっていたよ。態度で表情でまなざしで温もりで。あなたの愛情をちゃんと感じていたよ。

それでもたまに言葉が欲しくなっちゃうのが女子ってもんで――その日に限って粘ってしまった。だってつきあい始めてちょうど１０年の記念日だったし。あなたは忘れていただろうけど。

だからほら、案の定彼が泣いている。自分を責めて。いいの。言葉

なんていらないの。

そんな意味をこめて彼の手を握り返したけれど、伝わっていたかしら。もう力が入らなくて。だけどあなたも知ってたでしょう？　言葉なんかなくたってちゃんと私は幸せだったって。だから泣かないで。苦しまないで。

そして私は彼の嗚咽を聞きながら、前の生を終えたんだ。

空いた席に座ると、先ほどの男性が戸口に移ったことに気づく。

降りちゃうのか。

そうか。
ほんとに生まれ変わってくれたんだね。同じ時代に同じ人間として。
そして同じ電車に乗って。こんな奇跡起こすなんて、よっぽど思い詰めたんじゃない？

これで十分。ありがとう。

電車を降りていく彼に心の中でそう言って――

言おうとして。

違う――

息が止まる。

待って――

扉のほうを見る。

言わなきゃいけないことがあるの――

席を立つ。

伝えたいことがあるの――

気づいたら、彼を追って電車から飛び降りていた。たくさんの偶然を重ねてもう一度あなたに会えた。

私がその記憶を思い出したのは、伝えたいことがあったから。

あのとき言えなかった言葉を、彼女のかわりに伝えるため――そう。それはもう自分ではなくて。だからこそ使命感というか――あの人に言わなくちゃ、と、ホームを駆けたんだ。

速度を上げる電車の走行音に消えて、私の声は彼に届かない。

待って。待って。待って。

――と、駅を出て行く電車を見送るように、彼が立ち止まった。

「あの！」

彼がこちらを振り向く。少し驚いたような、待っていてくれたような。

声の届く距離まで進み、息を整えて――初めて彼の目を見た。

――ああ…。

胸にたくさんの想いが流れ込んでくる。この気持ちが私のものなのか、彼女のものなのか。それはわからない。そもそも境界線なんてあるの？

激しい流れに負けないように自分の手をぎゅっと握りしめて。私は彼に伝えた。

あの日彼女が言えなかったことを。

「さよなら！」

さよなら。もう苦しまないで。

一瞬大きく目を見開いて、少しだけ切ない目をして、それから2人分の優しい笑顔で、彼がさよなら、と返してくれた。

「……さよなら」

小さくもう一度言った。これは私の分。

さよなら、とまた返してくれる。

そして私たち――そう「私たち」は、手を振って別れたんだ。

帰っていく彼。次の電車を待つ私。

よかった。
会えてよかったね。
ね、前世の私？

私も、これから出会う恋を大切にしよう。今はまだそんな兆しないけれど――あの人カッコよかったな。でも彼女いるっぽかったな、残念。なんてね。

そんなことを考えながら。

さよなら、

もう一度そっとつぶやいたら――

少しだけ泣けた。
それはたぶん。

うん、これは私の涙。

さようなら、あなた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2317m/

前世の恋人

2011年11月15日20時20分発行